

新版はじめに

『政治学読本』が刊行以来一〇年以上を経過したため、改訂新版を出すことにした。初版刊行以来幸いにも多くの読者に迎えられ、政治という人間の営みに関する基本的な視座を開拓する試みとして一定の評価を受けたことは望外のことであり、今回の改訂でもデモクラシーの基本問題について新たに節を設けた第五章を除いては、初版の構成を基本的には維持し、若干の修正のみにとどめることにした。しかし、二一世紀に入り現代政治を取り巻く諸環境に大きな構造的変化が起きていることを考慮し、その変化を私たちがどう受け止めるかという点を中心に、終章を新たに書き加え、現代世界の諸課題と政治学との関わりについて考察することにした。新たに追加した終章は、本論の内容全体に関係するものではあるが、変貌する現代政治過程の動態的分析を直接にめざしたものではなく、二〇世紀におけるデモクラシーの発展を踏まえ、二一世紀にデモクラシーの諸原理を維持発展させるための諸条件に関する記述が中心となっている。その意味では、初版以来の政治の基本的問題に関する原理的考察というこの本の目標をさらに徹底させることを意図している。なお、初版に含まれていた福祉国家と国際政治を扱った最後の二つの章は今回割愛することにした。全体の分量を減らす必要があることに加え、福祉国家論については別の概説書を著す予定があること、国際政治学に関しては優れたテキストが多く刊行されていることが理由である。

初版刊行以来のこの一〇年余を振り返ってみると、ディストピア小説の流行が象徴しているように、人類の行く末には暗雲が立ち込めているのではないかと暗澹たる気持ちになることが多い。科学技術の発展による生活水準の向上に陰りが見え始め、環境破壊に象徴される経済成長の負の遺産が明らかになっていることに加え、人間が生き

る意味を確認する場面が見失われがちなことがその大きな要因であろう。国際政治の場面では一九八〇年代末の冷戦構造の崩壊によって、世界は大きな戦争の危機から解放されたかに見えたが、二一世紀に入っても覇権争いや資源の争奪など戦争の危機や武力衝突には終息が見えず、近年はさらに暴力と不寛容が世界大に拡大している。経済的にもグローバリゼーションの進行により先進国と途上国の経済格差が縮小し、世界が貧困から抜け出すことが期待された時期もあったが、現実に行進しているのは著しい格差の拡大であり、あらゆる価値が商品化されるなかで圧倒的多数の人々は安定した暮らしを営む基盤を失い、日々の生活を維持することに呻吟している。

グローバル資本主義の問題は経済的な側面にとどまるものではない。リスクを取ることを避け、新しい価値を生み出すのではなく過去の遺産を食いつぶしながら、流れゆく平板な「情報」を消費する商業主義がさまざまな領域で拡大している。さらに情報技術の飛躍的な発展のなかで虚偽の情報が瞬時に世界を駆け巡り、何が真実であるかが不明確になり、政治的な議論の基盤も失われようとしている。現実を直視することを避け、自分が見たいもの・信じたものにしか目を向けず、ヴァーチャル空間のなかで万能感を享受することに満足する。私たちは大きな世界の存在を想起することすらできない、どうしようもなく「けちくさい」存在になって、あらかじめ用意された規格品のような人生しか送れないのだろうか。私たちが自明のものとしている「現実」のどこに問題があり、それらを動かしていくために何ができるかを懸命に探究することは、政治学をはじめとする社会科学の大きな目標である。

この本のなかで提起している議論が、こうした状況に対して少しでも希望を見出す契機となることを願っている。初版のあとがきにも記したように、この本では、読本形式として通常教科書などでは取り上げない話題や、洋の東西古典からの引用も含めて記述に膨らみをもたせ、多様な角度から政治の営みや政治学を含む社会科学に興味をもつきっかけとなることをめざしている。こうした試みがどこまで成果を上げるのかはわからないが、活字離れといわれる若い学生にもぜひ手に取ってもらい、興味のある箇所から読み進めてもらうことを期待している。全般

的にやや生硬な文章かもしれないが、性急に必要な「情報」だけを求めるのではなく、そこからさまざまなものを読み取ってほしいと思う。この本の執筆にあたっては、先学諸氏の著書から翻訳を含め多くを学びまた引用させていただいている。この本の性格上それらを注の形で示すことは避け、原則として書名のみを示している。この点を先輩諸兄弟が御海容くだされば幸いである。

二〇二二年七月

廣澤 孝之